

## 「共に行動する情報・コミュニケーション

### ・アクセス保障を考える会」（仮称）発足のために

「反障害通信」57号の巻頭言で「**「障害者」が政治行動の先頭に**」という文を書きました。そのサブタイトルが、「**「共に行動する情報・コミュニケーション・アクセス保障を考えるために**」」でした。そのことの始動としての提起です。

2012年脱原発・反原発の官邸前行動が起きました。2011年の福島第一原発事故の後に原発再稼働の策動に反対する10万とか20万とも言われる大集会です。そのときは、わたしは関西で母の介護をしていて参加していません。その後、母を看取った後に、2014年秋から脱原発の毎週金曜の脱原発の官邸前集会に参加し始めました。その中で感じ始めたのは、「障害者」の参加を想定していない、とりわけ「聴障者」のことが参加者として考えられていないということです。コールとスピーチが音だけに頼る伝達になっていたのです。その官邸前の集会に波及して、国会前の特定秘密保護法反対の集会や2015年の戦争法反対の国会前のシールズや総がかりの集会につながって行ったのですが、そこでも同じような構図になっていました。いずれにしてもマイクをもっているひとが、間近まで行かないと観れないのです。そして、そもそもコールやスピーチが参加者に向き合ってなされていないのです。

それにそもそも、「障害者運動」の非政治化という問題もあります。かつて、いろいろな政治的課題の集会に手話を付けようという動きがあり、車いすの「障害者」の参加がありました。デモの先頭に車いすが並ぶということがあったのです。今は、障害問題での「障害者」デモはあるのですが、他の政治的な課題での集会に、白杖のひとたちの集団はありますが、車いすのひとたちの姿は見かけますが個人的なバラバラな参加になっています。

さて、わたしの「言語障害者」と規定される立場から、もう少し掘りさげてとらえ返してみます。かつて、「障害者」関係の集会には手話をつけようという動きがありました。で、わたしはコミュニケーション障害の共通性ということで、一緒に活動していくためにと手話を学んで、将来は手話ができる「言語障害者」のための手話通訳派遣制度も考えていました。で、手話をそれなりに身に付けていたのですが、聞いたことを手話で表せても、手話を読み取って音声言語にするということが難しいのです。ですから、通訳活動は、「誰もいないから仕方がない」ということでしかしていませんでした。そういう形で、少しは通訳をしていますが、それを活動としてちゃんと担わないと、なかなか通訳技術が身につかないのです。それでも、わたしが少しは手話通訳を担っていると、以前は通訳の依頼が来ていました。もちろん、自分が参加している集会に、手話通訳が必要な人が来て、通訳者がいないと、手話を付けていました。自分が参加しない集会での通訳の依頼が来たら、手話通訳を派遣するところを紹介していました。そういう状態の中で、どんどん「障害者」の全体的課題の集会、政治的な集会で、手話通訳がつかないということが増えてきました。そして、「聴障者」の参加を考えないような集会スタイルにもなっています。そうい

う中で、「聴障者」の参加を考えないから「聴障者」が参加できない、参加がないから「聴障者」の存在を考えなくなるという悪循環に陥っていったのだと思っています。

確かに、「聴障者」の団体の活動の成果や、世界的な「障害者運動」が進む中で、制度的には進んでいます。ですが、役所や公的なところでの講演会などでは、手話通訳がついて来ていますが、逆に政治的なところ、運動関係では逆に少なくなっているとしかとらえられなくなっています。

もうひとつの問題があります。かつてわたしが手話を学び始めたころには、将来はいつでもなんでも派遣をというところに進んでいくような要求がありましたが、結局「政治的・宗教的な集会には、公的な派遣ができない」ということの壁が取り除かれていません。幹旋通訳ということがあり、主催者が有料で頼めば派遣してくれるのですが、逆にそれで、主催者にできるだけ払わせるというようになってきていました。今年の4月から「障害者差別解消法」が施行され、「聴障者」に対する公的な派遣が広がりそうな動きはあります。ただ、インターネット配信していることが広がっている中で、そこでの視聴者の「聴障者」も含め、そしてそれなりの大きな集会には、いつでも「聴障者」が参加できるための、公的派遣が必要ですが、現状では難しい状況があります。

もちろん、それなりの大きな集会に主催者に有料でも手話通訳を準備するということを提起していく必要もあります。しかし、そもそも持ち出しでカンパを集めて集会をしていくときに、現実に「聴障者」の参加が少ない中で、どう保障をしていくのかということで、現実に手話通訳がつかなくなっているということがあります。

で、現実に「聴障者」が集会に参加していき、手話通訳を求めていくということと共に、手話を付けていく活動が必要だと、草の根の運動を始めています。

それらのことも含めて公的な派遣をどう使っていくのか、制度的などういう要求をしていくのかの議論も含めて考えて行きたいと思っています。

とりあえず、個人的なことを書けば、わたし自身が他のことに力量がなく、手話通訳のことを中心に考えていますが、今、IT技術の進行の中でスマホのアプリを使って、音声言語の文字化ということが進んでいます。また、若いひとは子どもの時から、パソコンを使い通常の音声言語を文字化できるひとが増えています。それらを使った情報・コミュニケーション保障も、わたし自身の勉強しながらの活動を考えていきたいと思っています。

もうひとつ、「重複聴覚障害者」のアクセス―集会参加の介助や他の「障害者」のアクセス―介助の問題の問題も考えて行きたいと思っています。

とりあえず、考えながら、行動に移します。そういう意味で、「共に行動する情報・コミュニケーション・アクセス保障を考える会」（仮称・準備会）として始めます。

これはまだ個人的提起、ちゃんと広げて呼びかける文の作成作業に入る前の提起です。とりあえず、取り急ぎの提起です。

(み)